「日々の理科」（第 1793 号）　2019,-6,-6

「裏磐梯紀行（５）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

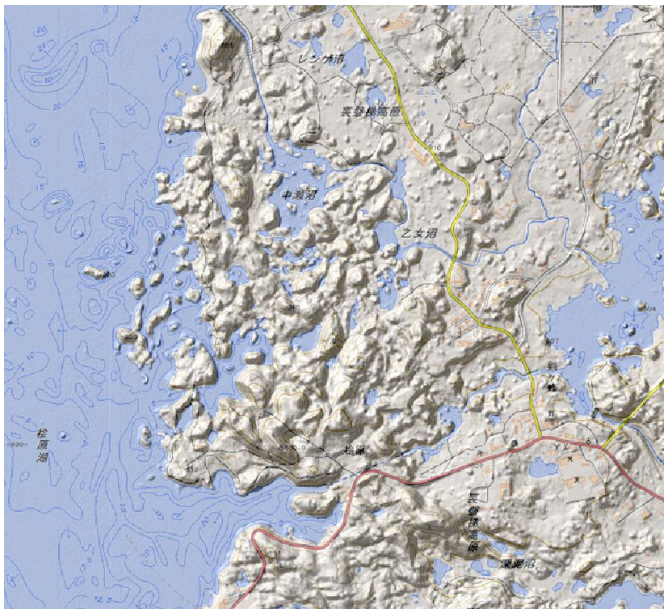
田中　千尋　Chihiro Tanaka

遊歩道のわきに、青々と茂っている一塊の植物があった。葉のつきかたはマメ科の植物にも見えるし、チゴユリのようにも見える。葉の撥水性はすばらしく、昨夜降った雨を、ハスの葉と同じぐらい弾いている。

どう見ても顕花植物（種子植物）なのだが、実はこれはシダ植物である。それも、誰もが知っている「ワラビ」なのだ。ワラビといえば、茎の先に渦巻きのように巻いた、「山菜のワラビ」の姿しか思い浮かばないだろう。しかし、あの渦巻きが開いて育つと、こんな姿になるのだ。教えられなければ、これがワラビとは、誰も気づかないだろう。

シダ植物である証拠が、この茶色く伸びた枝である。これは胞子を作って飛ばす器官で、「胞子葉」と呼ばれている。胞子葉は、キノコの本体（子実体）と同じ役割をしていることになる。

裏磐梯には湖（小野川湖や曽原湖）や沼（五色沼や中瀬沼）が多い。一番大きな湖が「桧原湖（ひばらこ）」だ。夏には遊覧船やカヌー遊び、冬にはワカサギ釣りや氷上クロスカントリーを楽しめる。



「裏磐梯（桧原湖東岸）の陰影地形図」／国土地理院

現在の裏磐梯の地形の大半は、1888 年（明治 21 年）の磐梯山の噴火によって形成された。この時の大噴火で磐梯山は大規模な山体崩壊を起こし、北麓には大量の岩石（主として輝石安山岩の岩塊）が押し寄せた。村は埋没し、川はせき止められて、いくつもの湖や沼ができた。その後 100 年以上を経て、植生（森や林）が形成され、現在の裏磐梯の景観を形成している。

現在、桧原湖の東岸に点在する小島や、陸地に散在する小さな丘は、この噴火の時に流されてきた砕屑物や岩塊の堆積丘である。こんな地形なので、桧原湖の東側は道路の敷設場所が限られ、ハイキング用の道も、丘や沼をぬうように曲がりくねってつけられている。